私どもは文法研究の中で語彙の問題を取り上げることで十分である（語彙論を独立した言語研究の分野とは考えず、語彙の問題は辞書＝単なる語彙項目の集合の記述に解消される）とする考え方には賛成出来ない。『幼児の語彙発達の研究』を著した第一の理由は、すでに多くの研究のある幼児の文法発達の研究に対応する語彙発達の研究の必要性を主張するものであった。前著をまとめたもう一つの理由は、日本の幼児の一人一人の言語の記述から出発しようということであった。その点では、多くの言語発達の研究に見られた、外国での研究を紹介するだけでこと足れりとしたり、特に英語を基礎として仮説された文法理論を日本語に適用するだけで十分であるとする風潮には不満を感じていたからである。その後も、国語学、日本語学側の研究は依然として少ないが、心理学者による幼児言語の文法研究は続けられており、少ないとしても日本の幼児の言語記述を基盤としてこれまでとは視点の変わった研究も展望の引用で示したように出て来ている。このたびの私どもの本は前述の展望によって参照された前田紀代子の発表で示した考え方を広く確認してゆこうとするもので、幼児は一人一人語彙発達の仕方に違いのあること、同じ品詞に属するものでも、語ごとに発達の仕方に違いのあることを前提とし、特に語彙の統合的発達の過程を明らかにするために、動作語一つ一つの形態の発達、格の取り方の発達を明らかにすることを課題としているのである。今後このような研究が進められることを期待するとともに立場の違いを越えて本書が研究の資料となることを期待して序としたい。

平成七年一二月

前田富祺

目　次

序……1
第一章　はじめに……7
一　幼児の言語発達研究の展望……7
二　幼児語彙の統合的発達研究の意義……9
第二章　初期の動作語の発達をめぐって……13
一　はじめに……13
二　三歳までの動作語の検討……15
一　はじめに……15
二　前言語期の記録から……16
三　三名の幼児の調査……18
四　語彙量の問題……18
三　動作語の初期語彙発達について……19
一　はじめに……19
二　Bの動作語の初期語彙発達……19

三　初期語彙発達のまとめ……40
四　名詞の動詞化から新語の獲得へ……43
一　幼児語から新語の獲得へ……43
二　名詞＋「スル」について……49
三　まとめ……53
第三章　動作語の用法の発達……55
一　はじめに……55
二　格の問題を中心に……55
一　はじめに……55
二　出入りの語……58
三　「飲む」について……81
四　「遊ぶ」について……85
五　存在に関わる語……87
六　格助詞について……108
七　まとめ……115
三　動詞の表現形と機能の発達の問題を中心に……118

一　はじめに……118
二　「飲む」について……122
三　「開く」「開ける」について……130
四　「出る」について……134
五　存在に関わる語……138
六　「見る」について……146
七　「行く」について……153
八　まとめ……171
第四章　幼児言語の統合的発達……176
一　はじめに……176
二　「取る」について……176
三　「開く」「開ける」について……184
四　「飲む」について……187
五　統合的発達　まとめ……188
第五章　おわりに……195
余章　展望と書評……204

一　児童の言葉――研究の現状と展望――……204
一　はじめに……204
二　〝児童の言葉〟研究の問題点……205
三　文構造・文章構造をめぐって……206
四　語彙・文体の研究を中心に……209
五　おわりに……211
二　国立国語研究所著『幼児の語彙能力』について……214
一　はじめに……214
二　本書の内容……216
三　調査方法について……219
四　おわりに……221
［附表］三歳までに出現した動作語一覧……223
図表一覧……229
参考文献……231
索　引……251
あとがき……258

第一章　はじめに

一　幼児の言語発達研究の展望

昭和五十八年に『幼児の語彙発達の研究』を公にした時に、私どもの立場からそれまでの幼児の言語発達の研究の展望を概観してみた。ここでは、その後の研究の状況を中心に述べてゆくこととする。

日本においては、言語学者、国語学者による幼児の言語発達の研究はあまり盛んでない。これに比して、心理学者による研究のほうが盛んなように思われるのである。心理学者による言語発達の研究の概観は、昭和五十九年の村田孝次『日本の言語発達研究』によってなされている。村田孝次『言語発達の心理学』では、近年（昭和五十三年ごろ）の研究が初期の統語構造の研究に偏向しているとして、「言語発達研究の心理学離れ」を述べているが、『日本の言語発達研究』においては、「見方によっては逆に、〈言語離れ〉を心配しなければならなくなっている」と述べ、「〈言語発達の研究〉というよりも、〈言語発達の基盤となるべき機能の発達過程の研究〉ということができる」としている。私どもの前著は言語研究の立場に中心を置きながらも心理学的な研究への橋渡しを考えたものであったが、その目的は十分に果たすことが出来なかった。村田孝次は、

言語発達研究の本筋はやはり、言語という人間独自の精神機能と文化としての言語（両者は不幸にして同じ名称で呼ばれている）との接点に焦点を合わすものであり、他の多くの精神機能と密接にかかわるとはいえ、言語の発達を中心にすえる研究領域を構成しなければならない。

ような立場に基づくものである。それは心理的には幼児の概念の発達を重視することに連なるものと考えられる。

本書で取上げることにしたのは、幼児の語彙の統合的発達の問題である。それは、ある意味では、幼児言語研究の〈心理学離れ〉と〈言語離れ〉とを避けようとする私どもの試みなのである。ここでは、語彙の体系を前提としつつ、一つの語が実際の言語活動の中で他の語とどのように結び付いているかを問題とする。私どもはまず一つ一つの語がどのように用いられているかを記述することが出発点であると考えている。文法的な枠組みの中では同じ分類の中に入れられるべき語であっても、他の語と実際にどのように結び付くかについてはそれぞれが異なる場合が多い。実際の文の中で語という要素同士がどういう関わり方を持っているかは統合的な関係であり、動作語の格支配の問題や動作語にどのように接辞が付いてゆくかの問題が中心となる。本書で動作語を中心において研究しようとしたのはそのためである。ここでは一つ一つの動作語の実際の使用例の記述分析から一つ一つの語の統合的発達を明らかにしようとする語彙論的な立場からの研究を目指しており、文法というものを仮説しておいて実際の文法的表現に演繹しようとしているのではない。

語一つ一つの統合的発達に違いがあるとともに、幼児一人一人の語彙の統合的発達に違いがある。それらを越えた普遍的な発達が認められるとしても、まずはそれぞれの実際の使用を記述分析してゆくことが必要な段階であると考えているのである。本書は一幼児の語彙の統合的発達の記述を中心とするものであるが、このような研究の蓄積の上に、普遍的な語彙発達の規則、文法発達の法則が明らかにされうるものと考えている。

注1　前田富祺『国語語彙史研究』、また、前田富祺「語彙論――国語語彙論の確立と展開――」（『国語と国文学』平成二年五月）を参照。
注2　柴田武「語彙研究の方法と琉球宮古語彙」（『国語学』87　昭和四十六年十二月）などを参照。
注3　前田富祺「文化としての語彙」（『国語語彙史の研究』十　平成一年）を参照。

第二章　初期の動作語の発達をめぐって

一　はじめに

幼児の言語発達の研究分野は多種多様である。多様な研究分野の中で、ここでは語彙発達の研究を進めることとした。もちろん本書で語彙発達の研究の全体を取り上げるわけではない。方法的にも一人の幼児についての縦断的な調査に基づく実態報告を中心としたものであり、当然、限界がある。しかし、現段階では、このような研究を基礎として積み重ねてゆくことが、必要だと考えているのである。本書の報告が、これからの研究の進展に少しでも役立つことを期待している。

前著『幼児の語彙発達の研究』では、「人を呼ぶ語」「食物を呼ぶ語」「動物を呼ぶ語」「アカカという語」「感覚・感情を表す語」などについて、語を記号化し、図によって示す方法で体系的な語彙発達を明らかにしようとした。私どもは語彙発達を意味を中心とする語彙の体系としてとらえる観点から、研究を進めてきたのである。

前著で取り上げた語は、主として体に関わる語、及び相に関わる語であった。用の分野の動作語については、語形・語義の問題だけでなく、格支配など統合的な発達をも考え合わせ、更には語用論的な観点を取り入れてゆくことが必要だと考えたのである。

動作語の機能は、述語として用いられることであり、述語として最も広範な用法を持っている。動作語については、形態・意味・統辞的関係等を統合的な観点から考えてゆく必要性を感じている。動作語は、ボイス、アスペクトなどの